～人狼と海賊の前日譚～

「悪役と脇役」

俺がヴァイトと呼ばれるようになる前、まだ人間だった頃のやりとりだ。

あの頃の俺はオンラインゲームの中で、親しくなったプレイヤーたちと雑談ばかりしていた。

『悪役が好きなんだよ』

俺がチャットすると、一番仲良しの「たこやき艦長」さんがうなずきモーションを表示する。

『悪役好きそうだよね。あれでしょ、強くて格好良くて気楽なのがいいんでしょ？』

おわかり頂けますか。

『そうなんだよ。正義のヒーローも好きなんだけど、しんどそうだから』

常に正しくないといけないし、敗北も許されない。役割上、物語を盛り上げないといけない。なんか大変そうだ。

『わかるー！　俺も脇役に憧れるもん』

『脇役いいよね。主役にない格好良さがあるし、気楽だし』

艦長さんの脇役好きも、俺にはよくわかった。

縁の下の力持ちポジションって憧れる。みんなに大事にされつつも、重大時に矢面に立たなくていいのは気楽だ。

しばらく「悪役か脇役か」で盛り上がった後、俺はこうチャットする。
『悪役でなおかつ脇役とか、最高じゃない？』
『あれだ、悪の副官ポジション！』
『そうそれ！』
ラスボスの傍らに控える、優秀で堅実で地味な懐刀。
もちろん野心などはなく、忠誠を誓う。だが滅私奉公ではなく、個人的な尊敬や信頼から上司に厳しい進言もする。
そして上司もそれをきちんと受け止め……。

俺はふと虚しくなる。そんな理想的な上司に、俺はまだ会ったことがない。叶わない現実を想像の世界に求めるのは人の常だが、俺のボスなら目の前にいる。
『ということで、艦長さんには悪のラスボスになってもらうしかないな』
『なんで』
『艦長さんがギルドマスターで、俺がサブマスターだから。俺が悪の副官になる』
『もう俺たち二人しかいないのに⁉』
日毎にプレイヤーが減っていく衰退期のオンラインゲームなので、ギルドに残っているのは俺たちだけだ。

『うちの会社も、これぐらい過疎ってくれたらいいのにな』
『わかる』
俺たちは力強くうなずき合う。

俺は冗談ついでに、彼にこう言った。
『もし艦長さんが本当に海賊船でも手に入れたら、俺が副長やるよ』
『まじかちょっとソマリア行ってくる』
『そういう海賊⁉』
『マラッカ海峡にいる方が好き？』
『それもなんか違うよね』
でも考えてみると、大航海時代の私掠船とかなら悪くないな。気の合う仲間と気ままな航海。そして無法な荒稼ぎ。うん、憧れる。
俺は笑いつつ、もっと艦長さんを困らせてみる。
『じゃあまずはゲームの中からだ。飛空艦が実装されたら、俺の為に飛空艦を買ってもらおうかな』
『おねだり彼女か！　任せとけ、ミッドシップのツーシーター買っちゃう！』
それ車じゃない？